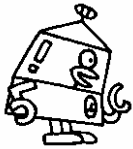


葉は、なぜ、たいいてい緑色をしているの



植物は、葉の中にある緑色の部分で、日光の助けをかりてデンプンをつくり、その養分で生きているからだよ。

庭に植えた植物は、何もしてやらなくても育つ

日の当たる庭にまいたたねは、ときどき水をあたえるだけで、たいいてい大きく育っていきます。土中には、今までふった雨水などがしみこんでいるし、土中のバクテリアが、かれ葉などを分解してつくった養分がたくさんあるからです。

植物は、葉の緑色の色素のはたらきで、日光の助けをかりて、根からすい上げた水と空気中の二酸化炭素から、デンプンをつくることができます（これを光合成といいます）。つくられたデンプンは、植物が成長するときの栄養分として使われたり、実やたねの中にたくわえられたり、いもや球根にたくわえられたりします。

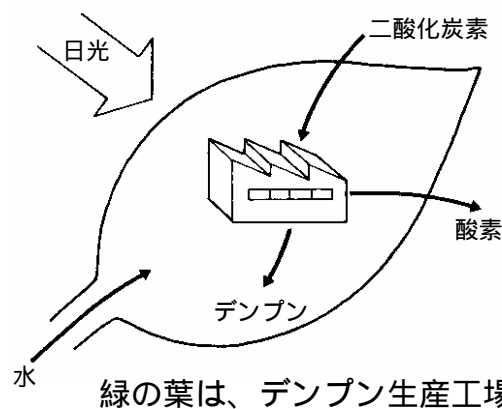
緑色の葉をもたない植物は、自分で養分をつくれぬ

植物を日光に当てないようにすると成長が悪くなるのは、日光の助けがなければ、植物は栄養をつくり出すことができないからです。

緑色の色素をもたないキノコなどの植物は、自分で栄養をつくることはできません。そのため、くさった物や、ほかの植物の根やみきから、養分をもらって生きています。

黒っぽい海そうや赤色の葉の中にも、緑色の色素は入っていて、日光の助けをかりて、デンプンをつくっています。

もやしやネギの白い部分を日に当てると、デンプンをつくることのできる緑色の色素ができて、緑色になります。



緑の葉は、デンプン生産工場